

〔資料〕

ひきこもり者支援に関する実証研究の動向 —文献検討からの示唆—

松本 訓枝¹⁾ 木下 拓哉²⁾ 大川 眞智子³⁾

Trends in Empirical Research on Support for Hikikomori People: Suggestions from an Examination of the Literature on Support for Hikikomori People

Kunie Matsumoto¹⁾, Takuya Kinoshita²⁾ and Machiko Ohkawa³⁾

I. 目的

ひきこもり問題は1990年代後半から注目され始め、その契機となった書籍『社会的ひきこもり —終わらない思春期—』において、斎藤(1998)は、ひきこもりについて「思春期心性に深く根差し、思春期独特の葛藤のパターンを何年も抱え続けている」ことを指摘し、思春期・青年期の問題としてこの問題に言及する。この当時、学齢期の不登校の問題が注目される中、学齢期後のひきこもり問題は、不登校と地続きの問題として関係者に受け取られたと言っても過言ではなかった。それは、不登校支援の限界と不登校からひきこもりへと続く、終わらない問題、課題を投げかけたと言える。

ひきこもりは、1980年代から1990年代にかけて不登校とほぼ同義の問題であった。不登校の中でも自室から出ない、外出しない等の閉じこもった状態をひきこもりとして捉えていた。しかし、2000年代初頭から学齢期後に「対人関係に不安がある」という点から、ひきこもりが社会問題の語彙として一般化していくことになった。行政では、保健所や精神保健福祉センター等の相談機関がひきこもり対応の第一的な相談窓口の性格をもつことになった。その後ニートとひきこもりの混同や、近年では中高年のひきこもりが注目され、若者問題としてのひきこもりがその対象範囲を拡大している状況にある(伊藤, 2022)。社会問題は周囲の人々が社会問題であると規定する相互作用の中で構築され(中河, 1999)、ひきこもりを社会問題とする

過程にひきこもり支援に関係する人々や家族等の認識が関与し、ひきこもりという問題が構築されている。したがって、現在、ひきこもり問題は、その対象を若者に限定せず、広範な年齢層を対象として捉える必要がある。

このような中、ひきこもり支援は、手探りの状態でNPO団体や親の会等により、訪問支援、居場所支援、就労支援、家族支援などが講じられてきた(荻野, 2006)。例えば、不登校・ひきこもり支援を長年に渡って進めてきた佐藤(2005)は、ひきこもり者の居場所から就学・就労への移行の困難を指摘し、柔軟かで多元的な奥行きのある外部社会との出会いによる社会像の再構築を提案する。佐藤の指摘、提案のようにひきこもり支援には蓄積されてきた多くの実践知があると推察され、こうした実践知を繋ぎ合わせ体系化された支援方法を見出し、支援方法を周知していくことが求められる。

この問題意識のもと、本稿では準備段階としてひきこもり者支援の実証研究について様々な学問領域の文献を収集しその動向から研究上の課題を検討し、今後のひきこもり者支援に関する研究、ひきこもり者支援の実践への示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 文献の選定

CiNii Research 及び医中誌 Web で検索のキーワードを「ひきこもり」「支援」として、論文を対象に検索の期間を

1) 岐阜県立看護大学 機能看護学領域 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学領域 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

2022年6月までにした。

本稿では、ひきこもり者支援に関する実証研究の知見を確認するため、重複文献はもとより、1) 大学・研究所の紀要論文、報告書、学会大会抄録、講演録、会議録、商業誌、一般誌の掲載記事、2) 日本学術会議協力学術研究団体に属していない学会誌、3) ひきこもり者の実証的研究でない論文(特集・解説、レビュー論文、理論的論文)、4) ひきこもり者に特化していない論文を除外した。なお、1) について、紀要論文を除外したのは論文内容の精度が多様で未査読の論文が掲載されていること、2) については、学会誌の中には特定の専門職の協会などの論文が含まれ、現場の実践報告に留まる傾向にあることから、日本学術会議協力学術研究団体に属している学会を対象に本団体に属していない学会誌を除外し、日本学術会議協力学術研究団

体に属している学会誌の中で実証研究の投稿論文(原著論文)を対象に選定した。

2. 文献検討の方法

選定した対象文献を精読し、著者・発表年・発表学会、研究目的、研究方法、結果の概要を研究者間で確認しながら整理し、結果の概要の類似性により文献を分類した。

III. 結果

1. 対象文献の概要

文献の選定に即して検索した結果、CiNii Research 818件、医中誌Webで910件の計1,728件が選出された。

研究者間で確認し、重複文献376件、1)は1,101件、2)は91件、3)は95件、4)は47件を除外し、対象文献は18件であった。対象文献は、結果の概要をもとに、支援

表1 支援施設における支援の特徴

No.	著者/ 発表年 発表学会	研究目的	研究方法：調査対象と データ収集の方法	結果の概要
1	中村 /2005 関東社会学会	支援者がひきこもり当事者に対して実際に何を行なっているのかをもとに、その背後にある現代社会観を明らかにする。	ひきこもり支援団体であるNPO法人Gにおける支援者15名前後対象の参与観察	支援者は、様々なハプニング(生活に意外なことや非日常的な要素を取り入れる、意表をつくなど)を持ち込み、ひきこもり当事者にコントロール不能な他者として、ひきこもり当事者の停滞した生活を揺り動かそうとしていた。支援者は、ひきこもり当事者との出会いを楽しみにしていることを伝え、ひきこもり当事者がこれらの偶発性を楽しむようにしていた。現代は、ハプニングや偶発性にさらされ、コントロールできない他者と出会わざるを得ず、ひきこもり当事者はこうした社会を受け入れ難く感じていた。
2	荻野 /2007 日本社会学会	ひきこもり支援施設における施設利用者の自己アイデンティティが肯定的に変容する条件とその限界について分析する。	ひきこもり支援施設α会の利用者11名対象のインタビュー調査、α会における参与観察	ひきこもり経験者たちが、対人的な交流の場に定着し肯定的な自己アイデンティティを構築する上で、施設の高度な相互行為儀礼(回避儀礼：苦痛、当惑、屈辱となる問題を会話に持ち込まず言葉に注意すること、提示儀礼：相手の存在や変化に対する認知の表明)を備えた空間となっていた。しかし、その儀礼性の高さが、新たな自己物語のリアリティを支えるのに必要な他者性を支援空間から減退させるために肯定的アイデンティティは強度を持ちえなかった。施設内の高度な儀礼性に自覚的になるほど、外部社会は彼らの面目に損傷を与える空間として思念されやすくなっていた。
3	川北 /2014 日本社会学会	若者が参加できる空間を獲得するうえで、支援活動のために展開される空間の意義について考察する。	ひきこもり支援団体Tネットワーク参加の若者3名対象のインタビュー調査、ひきこもり支援団体Tネットワークの会員対象の会員の状況に関する質問紙調査及びTネットワークにおける参与観察	支援空間内部の体験活動や人間関係の多様性は、必ずしも支援の意図と対応しない選択的な関与を可能とし、若者の側の価値観の変容や役割獲得のチャンスに結びついていた。また複数の支援拠点の存在は、長期化する支援においてトラブルが起きても別の支援空間に参加できる要因になっていた。こうした複数の空間での体験を対比することで、若者は自己理解や、将来展望のための基準を獲得することが可能となった。
4	御旅屋 /2015 社会政策学会	「居場所」を提供しようとする支援への利用者の参加の経験を、参入一定着—退出の3段階に分節化し、就労・就学に代表される、外部社会への参加までの過程を連続的・動的に明らかにする。	居場所Xの利用者と元利用者8名対象のインタビュー調査、補足資料として居場所Xにおける参与観察、支援者対象のインタビュー調査	居場所支援の利用者たちは数々の社会的実践から周縁化されているが故に、居場所への参加にも困難を伴っており、支援者たちは利用者の責任の度合いを下げる形(緩やかな参加の形)で利用者を居場所の周辺に位置づけようとしていた。こうした居場所利用者としてのアイデンティティの構築を経て、利用者は一般社会で広く通用する汎用的な資源(元気、コミュニケーション能力、友人、生活リズム)を居場所に見出し、外部社会への参加後は居場所利用者としてのアイデンティティは否定されていた。
5	原 /2015 日本臨床教育学会	フリースペースの場で何が生じているのか、若者の変容とスタッフの実践という両軸から分析する。	フリースペースに参加の若者1名対象の事例検討	相互応答的な場のなかで自らの「支えとするストーリー」をより生きやすく、確かなものへと構成しなおしていく若者の姿があった。そのような若者の再ストーリー化過程には、個への対応のあり方という視点を超え、スタッフのフリースペース内外を通じた体験や活動の機会の多様な保障とともに、聞き取りあう場を積極的に作り出すことによる「場づくり」の実践が関係していた。

施設における支援の特徴、支援方法の検討と支援モデルの作成、ひきこもり者からみたひきこもり経験の3つに大別された(表1~表3)。以下では、対象文献を表1~表3で示した番号(No.1~18)に即して記載する。

対象文献の発表は、2000-2005年が2件(No.1, 10)、2006-2010年が1件(No.2)、2011-2015年が6件(No.3, 4, 5, 11, 12, 16)、2016-2020年が9件(No.6, 7, 8, 9, 13, 14, 15, 17, 18)であり、2011年以降に刊行された文献がおおよそを占めた。また、発表学会は、社会学関連が4件(No.1, 2, 3, 8)、社会福祉学関連が3件(No.4, 7, 17)、心理学関連が3件(No.10, 12, 14)、教育学関連が2件(No.5, 16)、教育社会学関連が1件(No.6)、口腔科学関連が1件(No.11)、農業経済関連が1件(No.13)、精神神経科学関連が1件(No.15)、看護学関連が1件

(No.18)、その他が1件(No.9)であった。

調査対象者は、ひきこもり者が16件(No.2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 15, 16, 17, 18)、支援者が7件(No.1, 4, 6, 7, 8, 9, 14)、その他(ひきこもり支援イベント参加者)が1件(No.11)であり、ひきこもり者を対象にした文献が多かった。

データ収集の方法は、インタビュー調査が9件(No.2, 3, 4, 6, 7, 9, 14, 16, 18)、参与観察が9件(No.1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 16)、事例検討が5件(No.5, 10, 12, 13, 15)、質問紙調査が5件(No.3, 9, 11, 14, 17)、その他(ビデオ収録)が1件(No.8)であった。

2. 各対象文献の結果の概要

1) 支援施設における支援の特徴

支援者のひきこもり者への関わりや支援空間の特徴等、

表1 支援施設における支援の特徴(つづき)

No.	著者/発表年/発表学会	研究目的	研究方法:調査対象とデータ収集の方法	結果の概要
6	御旅屋/2017 日本教育社会学会	若者支援機関において、支援者・若者双方の立場から「障害」概念がいかなる意味をどのように付与されているかを明らかにし、医療化にまつわる議論を関係論的視点から捉え直すこと、若者支援において医療的概念を採用することの意味について検討する。	NPO法人Xが設置する居場所の利用者3名とスタッフ4名対象のインタビュー調査、当居場所における参与観察	障害を疑われる者の存在が支援の現場に混在性をもたらし、それは集団の同調圧力を軽減しコミュニケーションに困難を抱えた当事者の集団参加に対する障壁を押し下げる機能と、異質な他者との葛藤を通じた相互理解を促進する機能を期待されていた。当事者が自身の障害を意味づける初期段階で正常でないことの承認の要求が行われていた。当事者が自身の困難を障害と位置づける際に、若年無業やひきこもりという個人が既に有しているステイグマからの回復の志向や支援機関内で形成された関係性が影響していた。このように若者支援の障害の医療的概念は、若者個々人の志向や置かれた状態に応じ多層的に解釈されていた。
7	桑原/2020 日本社会福祉学会	居場所活動や就労支援という一定の線引きのもと行われているひきこもり支援実践について、諸活動への参加者(ひきこもり経験者や支援者など)の状況に対する認識を検討し、支援施設の活動の複合的な性格について確認する。	ひきこもり支援施設Yにおける利用者8名、支援者3名対象のインタビュー調査、支援施設Yにおける参与観察	一見して就労支援に思える支援施設におけるカフェの運営が、居場所活動であると位置付けられ、カフェ活動は居場所と就労の両義性を有し、居場所活動の延長線上にある就労の場として位置付けられていた。「ひきこもり」支援に関する制度的な整備が施策ごとに分割され、居場所支援と就労支援は制度的に境界が策定されているため、この両義性を有するカフェ活動は、制度的な支援をこの2者の支援のいずれかに決めねばならず運営の困難に陥っていた。
8	三部/2020 日本社会学会	ひきこもり(及びニート)支援を掲げるNPOにおいて、スタッフと地域のボランティア、支援の利用者が共存する空間が、どのような相互行為を通じ編成されているかを支援組織の活動への参加の入口である軽作業(自動車用ワイヤーハーネスの組み立て)の空間編成の実践から検討する。	ひきこもり(およびニート)支援を目的とするNPOの利用者、支援者対象の参与観察などのフィールドワーク(ビデオ収録を含む)	作業の参加者はテーブルに積み上げられたハーネスの身分の区別(すでに集計された束/まだ集計されていない山)を他の参加者に可視化し、この製品の身分の可視化を通じ、各自の作業の進行状況の区別(集計作業/組み立て作業)も周囲に可視化され、互いに重複しうる各自の作業空間の境界が管理されていた。これらは製品の集計における間違いを避ける実践だが、作業の進行状況の可視化は作業の道筋の予測可能性を作り出すことで他者の協力を得ながら作業を遂行することを可能にし、支援空間の参加にあたってコミュニケーション上の負荷を下げるようになっていた。
9	高階ら/2020 日本都市計画学会	生きづらさを抱えた人の居場所づくりを通じた支援の形態ごとの役割を明らかにすること、特にインフォーマルな居場所の実態や意義を把握することを通じ、地域の中で安心して暮らすための支援の一つとしてどのような要素を担うことができるか、可能性を考察する。	インフォーマルな居場所運営者3名、精神障害当事者6名(インフォーマルな居場所利用者、フォーマルな居場所を併用する者も含む)対象のインタビュー調査、居場所を運営している96施設・事業所対象の質問紙調査、インフォーマルな居場所X対象における参与観察	居場所は、フォーマル・インフォーマル、主な支援の目的が社会参加か自己自認かという2軸に分類され、それぞれ強みや役割が異なった。特に目的を就労や社会参加に限定しないインフォーマルな居場所には、他の形態と比較して目的設定、利用対象者、居場所にいる人の関係性、などが柔軟であるという特徴があった。居場所Xの参与観察では、上記3点の柔軟性に加え、運営・人の関わり方・空間・モノの使い方の工夫によって、利用者が明確に意義を感じていた。

支援施設における支援の特徴を明らかにした文献は9件 (No.1～9) であった (表1)。

文献No.1では、支援者が生活上の意外なことや非日常的な要素を取り入れ、意表をつく等のハプニングを持ち込むことでひきこもり当事者にコントロール不能な他者として現れ、ひきこもり者の停滞した生活を揺り動かそうとしていた。

文献No.2では、肯定的な自己アイデンティティを構築する上で、支援施設の間が高度な相互行為儀礼 (回避儀礼: 苦痛、当惑、屈辱となる問題を会話に持ち込まず言葉に注意すること、提示儀礼: 相手の存在や変化に対する認知の表明) を備えた空間となっていた。しかし、ひきこもり者が施設内の高度な儀礼性に自覚的になるほど、外部社会は

ひきこもり者の面目に損傷を与える空間として思念されやすくなっていた。

文献No.3では、支援空間内部の体験活動や人間関係の多様性は、ひきこもり者の価値観の変容や役割獲得のチャンスに結びつき、ひきこもり者にとって複数の支援拠点の存在は、トラブルが起きても別の支援空間に参加できる要因になっていた。

文献No.4では、ひきこもり者の責任の度合いを下げる緩やかな参加によってひきこもり者を居場所の周辺に位置づけることを通し、ひきこもり者は居場所利用者としてのアイデンティティを構築し、一般社会で広く通用する元気、コミュニケーション能力、友人、生活リズムを居場所に見出していた。

表2 支援方法の検討と支援モデルの作成

No.	著者 / 発表年 / 発表学会	研究目的	研究方法: 調査対象とデータ収集の方法	結果の概要
10	淡野 /2004 /日本心理臨床学会	ひきこもりという事象を心理社会的に捉え、当事者に対する支援のあり方を考察する。	メンタル系サイトのHPにメッセージを残し、これに応じたひきこもり当事者1名とのメール交換の内容と、その後ひきこもり当事者に実際に会う中で語られた内容をもとにした事例検討	ひきこもり当事者においては、『ひきこもる』アイデンティティの獲得」という発達課題が存在し、その支援は、当事者の「いま・ここ」をしっかりと見据えること、繋がりを続け、関係を「切らない」ことであり、ナラティブ・セラピーが基本とする「理解の途上にとどまりつづける」姿勢 (現実を認識しつつ諦めない関係性) であった。
11	小松崎ら /2013 /日本口腔衛生学会	ひきこもりと歯科疾患との関連性や効果的な支援を検討するための方策について検討する。	ひきこもり支援イベント参加者65名、ひきこもり支援団体が開設する居場所利用者68名の計133名 (うち、ひきこもり者75名) 対象の質問紙調査、居場所利用者19名対象の口腔状況の評価と口腔診査前後での緊張度の比較	ひきこもりが長期化した場合に歯・口の健康に「影響あると思う」と回答した者はひきこもり者群77%、家族・支援者群88%であり、歯・口で「気になる」ところ (症状等) がある率はひきこもり群で67%が「ある」と回答し、ひきこもり群が有意に高かった。また、歯科受診が、ひきこもりの改善に寄与すると回答したひきこもり者は71%であった。口腔診査前後、歯科指導後で歯科受診がひきこもり者のストレスとなる可能性は低いと考えられた。
12	三田村ら /2015 /日本認知療法・認知行動療法学会	マインドフルネスを用いた認知行動療法であるアクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT) によるエクスポージャー (不安を軽減する刺激に段階的に触れ、不安を消していく方法) がどのように作用し、従来のエクスポージャーとどのように異なるのかを検討する。	ひきこもり者1名対象の事例検討	ACTによるエクスポージャーが、ひきこもり者に容易に容認され、状態不安・特性不安の減少がみられ、生活上ではジムに通い、ジム内での簡単なやり取り、家族との会話もみられるようになり、最終的に専門学校へ通い始めた。ACTによるエクスポージャーは、対象者の症状、生活の双方において十分な効果をもたらした。
13	中本ら /2016 /日本農業経済学会	ひきこもり者の社会復帰または自立性向上に農園芸活動が果たす役割を、農業の医療的・福祉的效果から検討する。	ひきこもり者1名対象の事例検討	農園芸活動がひきこもり者の心身の健康回復に寄与し、集中力、コミュニケーションスキル、作業速度の改善をもたらした。
14	中地ら /2020 /日本人間性心理学会	全国の5か所のひきこもり支援団体の実態を把握し、支援者から見たひきこもり支援モデルを作成する。	5か所の支援団体に勤務する支援者9名対象の質問紙調査とインタビュー調査	質問紙調査から、①連携の重視、②1・2段階 (部屋からほとんど出られない～部屋から出られるが、家の外には出られない) では来談可能な親の支援及び本人との繋がりの作成、3・4段階 (コンビニや趣味の用事には外出できる～自由に外出できる) では親支援に加え本人への支援の実施など、ひきこもり支援独自の特徴があることがわかった。インタビュー調査から、「本人への支援」と「親への支援」、「支援団体・支援者の課題と目標」という支援モデルを作成した。
15	東出ら /2020 /日本社会精神医学会	東京都のアウトリーチ支援事業における8050問題事例の特徴、支援内容を明らかにし、支援効果と有効な支援方法を検討する。	精神保健福祉センターのアウトリーチ支援事業の32事例対象の相談録の検討	ひきこもり者の診断名は統合失調症が78.1%であり、問題行動や受療不安定、経済困窮や親の精神疾患等の問題がみられた。関係づくりや多機関連携を重視した支援が行われ、ひきこもり状態、支援の受入れ、医療状況、問題行動、地域ネットワーク作りについて、有意な変化がみられた。

文献No.5では、ひきこもり者自らの「支えとするストーリー」の構築には、フリースペース内外を通じた体験や活動の機会の多様な保障と、聞き取りあう場を積極的に作り出すことによる「場づくり」の実践が関係していた。

文献No.6では、障害を疑われるひきこもり者の参加が、集団参加に対する障壁を押し下げる機能と、異質な他者との葛藤を通じた相互理解を促進する機能をもたらしていた。

文献No.7では、ひきこもり者にとって支援施設における取り組みが居場所と就労の両義性を有しているが、居場所支援と就労支援には制度的に境界があり、いずれかの支援を運営者側が選択しなければならない現状にあった。

文献No.8では、支援空間の参加にあたっての作業過程がコミュニケーションの負荷を下げる形で他者の協力を得て遂行され、支援空間への参加が容易になっていた。

文献No.9では、居場所がフォーマル・インフォーマル、主な支援の目的が社会参加か自己自認かという2軸で分類を行うことができ、それぞれの強みや役割が異なっていた。

2) 支援方法の検討と支援モデルの作成

支援方法の検討、支援モデルの作成についての文献は、6件 (No.10～15) であった (表2)。

文献No.10では、ひきこもり者の「いま・ここ」をしつかり見据え、繋がり続け、関係を「切らない」支援方法に

言及していた。

文献No.11では、ひきこもりがう蝕等の歯科疾患のリスクを高めること、歯科受診の効果を明らかにしていた。

文献No.12では、認知行動療法が、ひきこもり者の状態不安や特性不安の減少、生活上では最終的に専門学校へ通い始めるなど十分な効果をもたらしていた。

文献No.13では、農園芸活動がひきこもり者の心身の健康回復に寄与し、集中力、コミュニケーションスキル、作業速度の改善をもたらしていた。

文献No.14では、支援モデルを作成し、「本人への支援」「親への支援」においてひきこもりへの理解や親や親子関係のアセスメント、ひきこもり者本人・親への個別・グループでの支援、社会との接点の支援等、「支援団体・支援者の課題と目標」において制度の課題や支援者の質の向上等を見出していた。

文献No.15では、ひきこもり者との関係づくりや多機関連携を重視した支援が行われ、ひきこもり状態、支援の受入れ、医療状況、問題行動、地域ネットワーク作りについて一定の効果がみられた。なお、本文献は40歳以上の高齢者層のひきこもり者を対象にその支援方法を明らかにしていた。

表3 ひきこもり者からみたひきこもり経験

No.	著者 / 発表年 / 発表学会	研究目的	研究方法：調査対象とデータ収集の方法	結果の概要
16	原 /2012 /日本生活指導学会	ひきこもり当事者の葛藤感覚に焦点化し、ひきこもりとその回復を対象関係論から同定しなおす。	若者支援団体Zの利用者3名対象のインタビュー調査、Zにおける参与観察	ひきこもった当初から、あるべき姿と乖離する自分への否定的な感覚や苦悩を抱えていた。それは、対人関係を獲得し就労を果たした後も継続して感じられ、彼らにとってひきこもり経験を語る際の中核に位置づけ、この苦悩は支配の対象関係に抑圧され責め立てられてきた状態であった。一方、この支配の対象関係に圧倒されつつ、自らが主体的に生きることでできる新たな対象関係を構築しようとする動きが見られた。生き方・働き方をめぐる彼らの葛藤や揺れは、支配の対象関係を放棄し新たな対象関係に組み替えていく際の必然的な揺れとして捉えることができた。
17	日吉 /2019 /日本社会福祉学会	ひきこもり当事者が乗り越えてきたものを当事者の視点から明らかにする	ひきこもり地域支援センターを利用し、学校に籍を置かず、就労していない18歳以上のひきこもっていた経験者及び準ひきこもり当事者49名対象の質問紙調査	ひきこもり当事者が乗り越えてきたものは、「人と接することに対する恐怖」「家や部屋から出ることに不安」「何かしようという気力のなさ」「過去のつらい出来事の想起」「人の視線に対する恐怖」「乗り物（電車など）に乗ることに対する恐怖」「他人の価値観の受容のできにくさ」「自分の中で何が起きているかの認識の低さ」「親子関係の悪さ」「自分の病気や障害に対するつらさ」「不登校やひきこもり経験に対する負い目」「自分自身の自信のなさ」であった。
18	玉田ら /2020 /日本精神保健看護学会	思春期の当事者がひきこもりに至り、支援機関に通所するまでのプロセスを明らかにする。	思春期に6か月以上ひきこもり、その後医療機関やNPO等の支援機関に繋がっている男女7名対象のインタビュー調査	思春期の当事者がひきこもりに至り、支援機関に通所するまでのプロセスは、コアカテゴリである同一性獲得に関わる「同年代から受ける刺激に向き合う」をはじめ12のカテゴリと30の概念から構成された。コアカテゴリである「同年代から受ける刺激に向き合う」は、「ひきこもるきっかけ」「ひきこもる生活」「脱却の試み」「回復の兆し」というプロセスにおいてどの時期にも影響を及ぼしていた。

3) ひきこもり者からみたひきこもり経験

ひきこもり者からみたひきこもり経験についての文献は、3件 (No. 16～18) であった (表3)。

文献No. 16では、ひきこもり者が抱える葛藤感覚—あるべき姿と乖離する自分への否定的な感覚や苦悩—が対人関係を獲得し就労を果たした後も継続し、この葛藤感覚がひきこもり経験を語る中核に位置づけられていた。

文献No. 17では、ひきこもり者が乗り越えてきたものに「人と接することに対する恐怖」「家や部屋から出ることに対する不安」等があがった。

文献No. 18では、ひきこもり者が支援機関へ通所するまでの過程で同一性獲得に関わる「同年代から受ける刺激に向き合う」がコアカテゴリとして関係し、ひきこもり当初から回復の兆しまでの一連のプロセスのどの時期にも影響を及ぼしていた。

IV. ひきこもり者支援の文献検討からの示唆

1. 学際的研究に向けて

本稿の対象文献の多くは、2011年度以降に刊行されていた。ここには、ひきこもり問題に関わる子ども・若者育成支援推進法などが施行され、支援が本格稼働していく時期との重なりをみることができる。また、対象文献の研究対象の多くがひきこもり者であり、支援施設に来所しひきこもりからある程度の立ち上がりを見せている状況下であって、研究方法はインタビュー調査や事例検討、参与観察といった質的研究方法を多く取り入れ、その場・その時に行われている支援方法、支援の特徴を明らかにしようとしていた。発表学会は社会学関連の文献を筆頭に、社会福祉学関連、心理学関連など多彩である点からしても、ひきこもり者をどのように理解すべきか、どのように支援すべきかといった問いを、ひきこもり支援者はもとより、それぞれの学問領域の研究者が所有していたと言える。ただし、学問分野ごとの立ち位置からの知見が提出されるのみで、分野を超えた学際的研究はみられていない。今後は、それぞれの学問分野で見出された知見を踏まえ、学際的研究から統合した支援方法を編み出すことが求められる。

2. 多様なニーズに即した支援方法の検討に向けて

本稿の対象文献は、支援施設における支援の特徴、支援方法の検討と支援モデルの作成、ひきこもり者からみたひきこもり経験に大別された。どのような支援が必要である

かを中心に多くの支援方法が見出されていた。例えば、ひきこもり者が乗り越えてきたものや支援機関へ通所するまでの過程を明らかにした文献 (No. 17, 18) があり、ひきこもり者のこれまでの歩みが明らかにされ、必要な支援が見出されている。ひきこもり者のこれまでの歩みを紐解くことは、支援方法を講じる上で極めて重要なことである。しかしその一方、これらの文献には、ひきこもり者がひきこもり自体を「どのように」「いかにして」乗り越えてきたのかといった点が問われていない。この実践的な問いを明らかにすることができれば、ひきこもりから立ち上がる過程とその諸相から立ち上がりに向けた支援への有益な示唆を得ることが可能となるだろう。したがって、この点からの研究が望まれる。

加えて、ひきこもりをどのように乗り越えてきたのかという実践的問いには、ひきこもりからの回復をどのように捉えるのかの問いがまた存在する。ひきこもりからの回復について経済的自立として就労を置く向きがあるが、それがひきこもり者にとっての自立か否かは議論の余地がある。ひきこもり者には、就労をめぐる規範的な価値意識への囚われがあり、「普通」に働かなければならないという規範的価値意識により、「普通」に生活できないことへの苦悩がある (岡部ら, 2012)。ここで対象文献をみると、支援施設における支援の特徴を明らかにした9件の文献では、No. 7の文献で唯一就労支援に関係したことが明らかになっているのみで、その他の文献は支援施設の働きやひきこもり者と支援者、ひきこもり者同士の相互作用を解明し、ひきこもりからの回復に関わる自立に至る過程まで明らかにされていなかった。支援方法の検討と支援モデルの作成の6件の文献においても、例えば集中力やコミュニケーションスキル等の改善 (No. 13) といった短期的なゴールが設定され、自立にまで踏み込み明らかにした研究は皆無だった。石川(2007)は、ひきこもりからの回復の目標に、社会参加という外部の次元に回収されない、存在論的安心の確保を掲げ、ひきこもり者が生きることへの覚悟と生きることや働くことの意味についての納得を手に入れることに言及する。ひきこもりからの回復を就労のみに限定せず多様な自立像を模索していく必要がある。ひきこもり者が自立に至る過程までを解明し、多様な自立像を検討することにより、ひきこもり者それぞれのニーズに即した多様な支援を展開できる可能性がある。

対象文献では、一つの支援機関内部の支援方法と特徴が明らかにされてきた傾向にあった。しかし、支援は一つの支援機関に限定されず多様に存在し、支援機関同士の連携・協働の実態を明らかにする必要がある。さらに、本稿の対象文献 (No. 2) が指摘するように、ひきこもり者たちが強度に能力主義的な世界であるとイメージする外部社会において、能力主義では括れない社会的な場・関係もあり得るという社会像を構築できる人やモノ、場との出会いについて、支援機関内外の対人的関係のつながりの糸なども踏まえて明らかにする必要があるだろう。それは、竹中 (2010) の言及する、ひきこもり者の「暮らしの世界」—家庭内はもとより、日常生活上で関わる人々、作業所やハローワークなどの機関を含めた社会関係、社会空間—の重要性に重なるところでもある。なお、ひきこもり支援は都市部の事例をモデルに展開しているが (石川, 2016)、ひきこもり支援は、都市部のみならず地方においても農福連携 (足達ら, 2020) などの多様な支援が展開されている。地域ごとの特性によって生じるであろう支援の差異にも注目しながら、研究を進めていかなければならない。

本研究において利益相反は存在しない。

対象文献

- 原未来. (2012). 対象関係組み替え過程としての「ひきこもり」と〈回復〉—当事者の語りと支援実践から—. 生活指導研究, 29, 175-193.
- 原未来. (2015). 〈若者支援〉におけるフリースペース実践—「居場所」で紡がれる若者たちのストーリー—. 臨床教育学研究, 3, 110-126.
- 東出香, 新村順子, 西いづみほか. (2020). 東京都アウトリーチ支援事業における長期高齢化したひきこもり 32 事例の後方視的検討. 日本社会精神医学会雑誌, 29(3), 205-214.
- 日吉真美. (2019). 「ひきこもり」当事者が乗り越えてきたもの—全国のひきこもり地域支援センターを利用している当事者の主観的な体験に着目して—. 社会福祉学, 60(3), 52-62.
- 川北稔. (2014). ひきこもり経験者による空間の獲得—支援活動における空間の複数性・対比性の活用—. 社会学評論, 65(3), 426-442.
- 小松崎明, 江面晃, 黒川裕臣ほか. (2013). 社会的ひきこもり者の歯科保健医療に関する検討—ひきこもり者に対する質問紙調査の結果から—. 口腔衛生学会雑誌, 63(1), 21-27.
- 桑原啓. (2020). 「ひきこもり」支援施設の活動とその両義性—フレーム概念を通じて—. 社会福祉学, 61(2), 45-58.
- 三田村仰, 武藤崇. (2015). 社交不安によりひきこもっていた青年に対するアクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT)—マインドフルネスを活用したエクスポージャー技法のプロセス—. 認知療法研究, 8(1), 71-83.
- 中地展生, 山口祐子. (2020). ひきこもり支援モデル作成のための基礎研究—支援団体および支援者への調査から—. 人間性心理学研究, 38(1), 53-64.
- 中本英里, 胡柏. (2016). ひきこもり者の社会復帰と自立性向上に果たす農園芸活動の役割—農業の医療・福祉効果に関する実験社会科学的考察—. 農業経済研究, 87(4), 319-333.
- 中村好孝. (2005). 支援活動からみたひきこもり—ある民間支援団体の事例を手がかりにして—. 年報社会学論集, (18), 136-146.
- 荻野達史. (2007). 相互行為儀礼と自己アイデンティティ—「ひきこもり」経験者支援施設でのフィールドワークから—. 社会学評論, 58(1), 2-20.
- 御旅屋達. (2015). 若者自立支援としての「居場所」を通じた社会参加過程—ひきこもり経験者を対象とした支援の事例から—. 社会政策, 7(2), 106-118.
- 御旅屋達. (2017). 若者支援における「障害」の位置価. 教育社会学研究, 101, 131-150.
- 三部光太郎. (2020). 「製品の身分」と作業状況の可視化—空間編成の方法と共同作業への参加可能性—. 社会学評論, 71(3), 466-481.
- 高階麻美, 後藤智香子, 新雄太ほか. (2020). 生きづらさを抱えた人の居場所づくりを通じた支援の実態と可能性—インフォーマルな居場所に焦点を当てて—. 都市計画論文集, 55(3), 968-975.
- 玉田聡史, 松下年子, 片山典子. (2020). 思春期にひきこもった当事者が支援機関に通所するまでのプロセス. 日本精神保健看護学会誌, 29(1), 13-22.
- 淡野登志. (2004). 『「ひきこもる」アイデンティティの獲得」とその支援. 心理臨床学研究, 22(5), 531-541.

文献

- 足達恵美, 中山京子, 国藤美紀子. (2020). 安芸市が取り組む「農福連携」—障害や生きづらさを抱えた方への就労支援—.

保健師ジャーナル, 76(3), 216-221.

石川良子. (2007). ひきこもりの〈ゴール〉 —「就労」でもなく「対人関係」でもなく— (pp. 229-238). 青弓社.

石川良子. (2016). 「ひきこもり」支援の展開 —地方への広がりに着目して—. 松山大学論集, 28(3), 75-95.

伊藤康貴. (2022). 「ひきこもり当事者」の社会学 —当事者研究×生きづらさ×当事者活動— (pp. 1-9). 晃洋書房.

中河伸俊. (1999). 社会問題の社会学 —構築主義アプローチの新展開— (pp. 21-46). 世界思想社.

荻野達史. (2006). 新たな社会問題群と社会運動 —不登校、ひきこもり、ニートをめぐる民間活動—. 社会学評論, 57(2), 311-329.

岡部茜, 青木秀光, 深谷弘和ほか. (2012). ひきこもる若者の語りを見る「普通」への囚われと葛藤 —ひきこもる若者へのインタビュー調査から—. 立命館人間科学研究, 25, 67-80.

斎藤環. (1998). 社会的ひきこもり —終わらない思春期— (p. 30). PHP 研究所.

佐藤洋作. (2005). 〈不安〉を超えて〈働ける自分〉へ —ひきこもりの居場所から—. 佐藤洋作・平塚真樹, ニート・フリーターと学力 (pp. 210-211). 明石書店.

竹中哲夫. (2010). ひきこもり支援論 —人とつながり、社会につなぐ道筋をつくる— (pp. 47-49). 明石書店.

(受稿日 令和4年8月25日)

(採用日 令和5年1月4日)